

2019 年度入学式 式辞

ことのほか穏やかだった冬が去り、今年は早くも桜前線が、ゆりが丘の上に立つ、尚綱の学び舎にも訪れようとしています。

まさに、気淑しく風和らぐ今日、尚綱学院大学、大学院の入学式を迎えられた皆さん、まことにおめでとうございます。心よりお祝いを申し上げ、歓迎をいたします。

またそれぞれの若い歩みを見守り、自分のこと以上にその幸せを願い、大切に支え導いてこられた、保護者、ご家族の皆様におかれましても、今日までの長い道のりを振り返れば、言葉では言い尽くせぬ感慨がおありのことと拝察申し上げます。心からお喜びを申し上げます。

尚綱学院は、明治 25 年の創立以来、「キリスト教の精神を土台として、自己を深め、他者と共に生きる」人物の育成を建学の精神として大切に受け継いできました。キリスト教主義の学校ですが、校名は、儒教の古典である「中庸」の「衣錦尚綱」——内面を大切にし、外見を誇らない、という意味ですが——という言葉から採られています。大学の正門には、太宰府天満宮の門前にでもあるような、立派な梅の古木があり、そこから校舎の方に上る坂道には、お釈迦様がその木の下で悟りを開いたということでお寺によくある菩提樹の並木が続いている、という、少し風変わりな大学でもあります。

本学の 3 つの学群に入学された皆さんは、これまでにプレ・エントランスデーなどに参加して、これからの学びについておよそのイメージを持っている、という人もいますが、これから始まる新しい生活に、大きな夢と希望と、同時に、一抹の不安を抱えているという皆さんもまた多いことだろうと思います。

よく、「自分探し」と言われますが、「自分」というものは、自分の周りをいくら探しても、その辺に転がっているというものではありません。「可能性は心の中にある」、というのは、今から 16 年前、尚綱学院大学が 4 年制大学として新しく出発した時のキャッチフレーズです。

皆さんは、青色発光ダイオード、LED の発明によって、赤崎勇、天野浩、中村修二の 3 人の日本人研究者が 2014 年度のノーベル物理学賞を受賞したことは、よく知っているでしょう。赤や緑の光を発する半導体は既に開発されていましたが、白色光源を作るた

めにあと一つ、どうしても必要な青い光を求めて、世界中で研究開発が進められていました。

この発端は、当時名古屋大学にいた赤崎教授が、当時まだ学生だった天野さんとともに、それまで不可能とされていた窒化ガリウムの良質な結晶の成長を実現したことでした。さらに、LEDを作るには、これに微量のインジウムという物質を入れる必要があったのですが、これに成功したのは、NTTの研究者でした。しかし、これらはすべて、理論上の可能性に基づく、実験室での成果です。LEDを実用化するためには、もう一つ大切なことがありました。それは、高品質の窒化インジウム・ガリウム半導体を安価に、安定的に製造する技術です。それを成し遂げたのが、当時日亜化学という、四国徳島の中小企業の一研究者であった中村修二さんでした。彼は、いわば半導体の結晶を焼き上げるプロでした。彼の言葉を借りれば、「俺はいい『窯』を持っていた」ということになります。

当時、ほとんどの研究者は、窒化ガリウムではなく、セレン化亜鉛というもう一つの候補物質によるLEDの作製を目指していました。なぜわざわざ、当時ほとんどの人が不可能だと考えていた窒化ガリウムに取り組んだのか、と聞かれて、中村さんは、「世界中で窒化ガリウムに取り組んでいる人が5人しかいなかったからだ」と答えています。

誰もが無理だというからこそ挑戦した、青色発光ダイオード、LEDを可能にしたもの、それはまさにこの精神の中にあっただのです。そして、何人もの異なる強みを持った人たちが、安価でエネルギー効率の良い、新しい光源を実現して、環境にやさしい光で世界を明るく照らしたい、というミッションに向かって、知恵の限りを尽くしたからこそ、実現したものだと言えるでしょう。

ノーベル賞をとれる人はごくわずかです。尚絅学院の初代校長のアニー・ブゼルは、お金持ちや学識の人になることも大切だけれど、誰もがそうなれるわけではない、しかし、我々は誰もが「良き人」になることはできる、我々が「良き人」になることによって、我々の存在自体によってこの世界が良き所になるのだ、と述べています。私たちがめざすものは、人それぞれです。しかし、内村鑑三が「後世への最大遺物」という講演の中で引用しているように、「我々が死ぬときには、我々が生まれた時より世の中を少しなりともよくして往こうではないか」というジョン・ハーシェルの思いは、すべてに共通していると思います。

私の印象に残っている一人の学生のことをお話ししたいと思います。私をはじめその学生を見かけたのは、入学式が終わって間もない、ある麗らかな午後のことでした。すれ違って軽くあいさつしたのですが、彼女は無表情で、少し暗い影を引きずっているようにも見えました。

その日からどのくらいの時間が流れたでしょうか、ある団体の主催する環境関連のイベント会場だったと思います。彼女はイベント運営のボランティアをしていたらしく、私は彼女から、「Tシャツを作ってみないか」と呼び止められたのです。僕は彼女に500円玉を一つ渡し、草木染の絞り方を教えてもらいました。その時作った、というよりほとんど彼女に染めてもらったTシャツは、今でもクロゼットの引き出しの奥に大切にしまっています。

その次に彼女と会ったのは、今度は尚絅学院大学主催のイベント会場でした。彼女は、たぶん子供たち向けの展示だったのでしょうか、風変わりな木の実を並べて、植物がどんなに多様で、どんなに不思議な生き方をしているのかについて、私に熱く語ってくれました。その中に、葉っぱの真ん中から枝のようなものが出て、その先に小さな丸い実が二つ付いている不思議なオブジェのようなものがありました。何の実かと聞くと、菩提樹の実だということです。私は何年もあの正門から続く坂道を歩きながら、迂闊にも、菩提樹の実がそんな不思議な姿をとって新しい命をつないでいるとは、その時まで知らなかったのです。

そして彼女は卒業していきました。私は彼女がもともと環境について学びたくて尚絅に来たのかと思っていましたが、卒業に当たって彼女が書き残していた文章によれば、彼女は入学後の4年間を過ごすうちに、自然の有難さを実感し、自然を守るための環境活動をするという思いが生まれてきたのだと述べていました。菩提樹の不思議な形をした木の実も、一役買っていたのかもしれませんが。大学に入った当初、こんなにも様々な活動ができるとは想像もしていなかった、4年前の自分に出会えたら、自分の選択は間違っていないと伝えたい、彼女はその短い文章の末尾をそう締めくくっていました。

彼女は、環境に関連する企業に就職したと聞いていましたが、その後一度だけ彼女を見かけたのは、これも大学主催のSDGs—国連の持続可能な発展目標に関するシンポジウム・ワークショップの会場でした。現役の学生や、企業やNPOで活躍している人たち、自治体関係者など、年齢も立場も異なる様々な人たちの輪の中で、大学を卒業したばかり

りの彼女は、SDGsの実現に向けて自分たちに何ができるかについての話し合いの、ファシリテーター役を立派に務めていました。その姿は、大学で生活環境を専門に学んだ者としてのプライドとともに、ライフワークとしての自分のミッションに対する使命感にあふれているように見えました。

私は彼女の様子を遠くから眺めながら、彼女のその生き生きとした姿が、今の彼女のすべてを物語っている、と思いました。そしてここにも一人、ブゼル先生の言う「良き人」を見つけたような気がしました。

より良い社会を作るために、自分に何ができるかを常に問い、それを目指して走り続ける、そんな一人一人の物語、一人一人の学生が、一日一日新しいページに綴る、一人一人違う物語が、大学の、そしてやがては東北の、さらにはこの国の新しい歴史を作っていきます。自分らしく、自分の可能性を最大限に追求する、それが尚綱の伝統なのかもしれません。

私たちのこの大学も、これまでの伝統をしっかりと大切に受け継ぎつつ、今日から皆さんと共に、また新しい歩みを始めていきます。その主人公は、今日ここにいる皆さんを含めた、尚綱学院大学の一人一人の学生です。みんなで力を合わせて、共にこの大学の新しい歴史を作っていきましょう。

皆さんの前途に、神の豊かな祝福を祈りつつ、2019年度入学式の式辞といたします。

2019年4月4日

尚綱学院大学学長 合田 隆史